

病と経験の可能性

Disease and the Capability of Experience

河本英夫

Hideo Kawamoto

カントに「経験の可能性の条件」という語がある。たとえば時間は、感性的経験の可能性の条件であり、感性の形式である。昨晩の晩御飯である炊き込み御飯、その前日のステーキ、そして前々日の煮込みうどん、さらにもう一日前の焼きうどんと配置してみる。配置ができるのであれば、それらを共有の座標軸の上にのせているはずである。いまこの配置のなから、ステーキだけを取り除いてそこを空白とする。想起された事象の中から特定のものだけを取り除くことは容易である。だがそれらが配置してある共通の座標軸そのものを取り除くことはできるのだろうか。カントは座標軸そのものは取り除くことができない本来的なもの(経験に先立つアリオリなものだと呼んだ)だと考え、またそれは人間にとって生得的なものだと考えていた。どの

ような経験であつても、前後の配置関係を設定できるのであれば、ありうべき経験の可能性という点からみて、この共通の座標軸は可能的な経験の条件となる、というのがカントの言い分である。

ここでのポイントは、「条件」と「可能性」という語である。条件というのは、論理的には必要条件のことであり、一般にはなくてはすまずわけにはいかな程度度の弱い条件から、個々の事象を出現させるほどの根拠や基盤のような強い原理性までが含まれてしまう。それを一括りに「可能性の条件」だと呼んだのでは、今日ではもはや粗っぽすぎるのである。初期の認知科学では、しばしばカントの感性形式としての時間や空間が記述されていたが、現在ではこうした記述を行なうものはほとんど見当たらずになつてしま

た。それは可能性の条件という設定での記述のレヴェルが粗すぎるからである。

もうひとつの「可能性」について、カントはまだ経験してないことも含めて先々起こる経験でも当てはまっている程度の内容を込めようとしている。ところがこの可能的経験は、同じようなタイプの経験の無限集合を設定している。先々の経験を含めて、すでに同じタイプの経験の延長上に可能性の幅を設定している。これが一八世紀ヨーロッパ古典期ということの内実のひとつである。

だが経験の可能性というとき、いったいどのようにしたら既存の経験の延長上にならないものを知りうるのだろうか。実際、数週間の記憶が飛んでしまい、現在・未来と数年前の記憶とが地続きになつていることもあり、幼少期の記憶は明確だが、ある年齢以降、現在の経験も含めて一切記憶の蓄積がないということもある。特定の感情たとえば特異な恐怖が作動すれば、おのずと特定のイメージ(顔や風景が自動的に出現してしまうような場合、このイメージは時間順序とは別の仕方では想起されている。また感覚が運動性

の働きとして作動する常同症(たとえば同じような言葉を繰り返し反復する)のようなタイプのものは、運動の結果を後に時間配置できても、運動の反復継続は時間順序によって規定されているのではない。つまりカントのように同じタイプの経験の延長上で経験のモードを覆うことはできない。前後関係の配置による秩序化とは異なるモードの経験は、実は山のようにある。

このとき問題になるのは、可能性をどう捉えておくかである。現在もついている経験を延長させれば、多くの場合カントのように既存の経験の限界のない延長だけが想定される。そうではないとわかつていても、予期や予想の本性上そうなつてしまう。そしてその延長上にならないものが、いわば経験の残余、経験の余剰、経験的に不可能なもの、配置できないものという位置づけをあたえられる。実はこうした位置づけがまだまだカント的なのである。というのもそうした経験を見出したとたん、それを健全な思惟の主体(理性)の限界の外に置いておくこと、理性に制限をかけて理性の対象外だとしておくことが、カント哲学の基本ラ